

大雪山系縦走報告

M3 只左一也

3日目 (8月29日(土))

2009年8月27日(木)ー9月6日(日)

メンバー：M3 只左一也、M3 大橋雄一

1日目：羽田空港→旭川空港→(バス)→層雲峡
→(ロープウェイ・リフト)→七合目→
黒岳→黒岳石室 (小屋泊)

2日目：荒天のため沈黙 (小屋泊)

3日目：黒岳石室→間宮岳→旭岳→間宮岳
→北海岳→白雲岳避難小屋 (小屋泊)

4日目：白雲岳避難小屋→忠別岳→五色岳→
沼ノ原大沼 (幕営)

5日目：沼ノ原→五色岳→化雲岳→
ヒサゴ沼避難小屋 (小屋泊)

6日目：ヒサゴ沼避難小屋→トムラウシ岳→
南沼キャンプ場 (幕営)

7日目：南沼キャンプ場→オプタテシケ山→
美瑛富士避難小屋 (小屋泊)

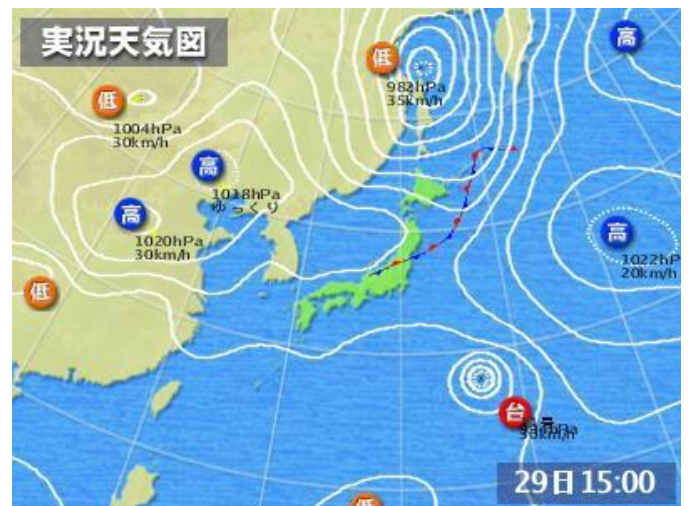
8日目：避難小屋→美瑛富士→美瑛岳→
十勝岳→上ホロ避難小屋 (小屋泊)

9日目：上ホロ避難小屋→富良野岳→
富良野岳分岐→(原始ヶ原)→五反沼
→(原始ヶ原)→富良野岳分岐→
原始ヶ原登山口→(車道)→布礼別→
(バス)→富良野駅→(電車)→
上富良野駅→日の出キャンプ場
(幕営)

10日目：十勝岳温泉往復 (幕営)

11日目：上富良野→旭川空港→羽田空港(解散)

起床	03:00	
黒岳石室		04:50 発
桂月岳	05:00 着	05:15 発
黒岳石室	05:25 着	06:20 発
北鎮岳分岐	07:40 着/発	
中岳	08:00 着/発	
中岳分岐	08:20 着/発	
間宮岳	08:50 着/発	
旭岳	10:15 着	10:20 発
間宮岳	11:35 着/発	
北海岳	12:35 着/発	
白雲分岐	14:00 着/発	
白雲岳避難小屋	14:40 着	(小屋泊)
(歩行時間：約8時間)		



午後3時の天気図。樺太の北側の低気圧のせいで1日中、強風が吹き荒れた。

前日の夕方に天気図をつけて、この日は低気圧も前線も抜けて天気が回復すると予想していた。私たちは、北海道を通過した低気圧ばかりに気を取られ、その北側にあった低気圧が発達中で強風が予想されることに気付かなかった。しかし、小屋の人が、午前中は風がすごく強いから無理をしない方がいいよ、と言っていたので、朝起きて様子を見てから出発を決めることにした。

朝起きてみると、外はガスがかかっている。1、2日目の報告書で書き忘れたが、27日にテントを張って

いた鳥取大学ワングル部の5人組が前日、小屋に逃げ込んでいた。彼らはすぐ近くの桂月岳（1938m）と黒岳をピストンしてから白雲岳避難小屋を目指すと言って、空身で出かけて行った。食事をしていると、次第にガスが薄くなってきたので、日の出の時間に合わせて私たちも桂月岳のピークをピストンすることにした。

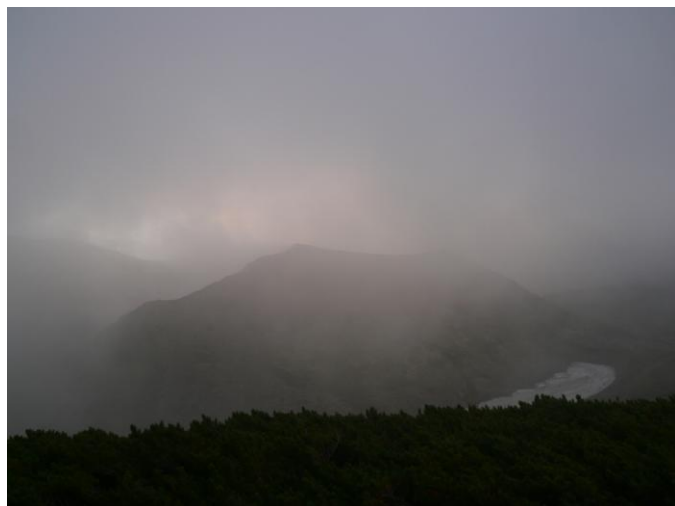
小屋からピークまで緩やかな斜面を登って行くと、鳥取大学のパーティーが下りてくるのとすれ違った。10分で山頂に到着。風はそれほど強くない。生憎ガスの中だったが、東の方が次第に明るくなって少し青空がのぞき、このまま晴れるでは、と期待させてくれた。しかし、またすぐにガスに覆われてしまい、日の出は拝めずに小屋へ引き返した。



桂月岳の山頂付近。雰囲気はいいのだが、生憎、霧の中で展望はない。



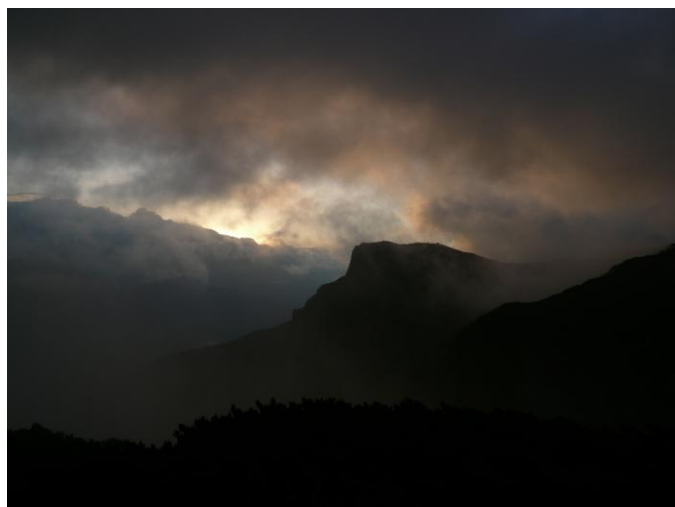
黒岳石室のすぐ近くの桂月岳。



山頂でじっとしていると東が明るくなってきた。



庭園のような斜面を登って行く。



このまま晴れるのでは、と期待したが、またガスに覆われてしまった。

小屋の管理人さんが、御鉢平の周り、特に北鎮岳のあたりはものすごい風だから行くなら気をつけて、と言ってくれた。何故だか、この小屋の管理人さんはまだ若い人だったが、私たちにすごく親切にしてくれた。

天気が回復するのが分かっているので、行ってみてあまりにも風がひどくて危険なようだったら引き返すつもりで、支度をして出発した。

しばらくは、ハイマツと草地の入り混じる広大な高原風の平らな道を進む。ここは、本州では想像もできないようなチングルマの広大なお花畑が広がっており、残念ながらすでに花は落ちて白い羽毛のような種をつけていたが、夏の最盛期の景色を想像しながら歩くのも楽しかった。それに、このチングルマの白い綿毛のような種も遠くから見るとまるで花のようで、なかなか見事だった。

また、地衣類という植物が密生しているところもあり、不思議な景色を作っていた。

程なく、御鉢平という大雪山の中心火口の縁に到着。15万年ほど前ここに火山ができたのだが、3万年ほど前に大爆発してカルデラ湖となり、1万年前にはカルデラの壁が少し崩れて水がなくなり、今のようなカルデラになったという。この御鉢平はこの日の目玉だったが、生憎ガスがかかっている全体が見えず、大変残念だった。



平らな道を進む。



お花畑のように見えるが・・・



石室に引き返し、支度をして北鎮岳、旭岳方面へ出発。



実はチングルマの種。



この白い花に見えるのはすべてチングルマの種。



これは恐らくナギナタゴケという地衣類。



これでも十分きれいだが、7月の花の盛りの頃はきっと絶景だろう



ときどきハイマツの中を進む。



この白いのは地衣類。





御鉢平の縁へ登って行くにつれて、次第に風が強くなってきた。



御鉢平全体を見渡せる展望台。残念ながらガスのため、全体を見渡すことはできなかった。



御鉢平の縁にさしかかる





御鉢平の底は有毒ガスが噴き出しているの、立ち入り禁止になっている。



黒岳（右）と桂月岳（中央）を振り返る。

御鉢平はお椀のようになっていて、登山道はその縁をぐるっと回るように付けられている。稜線を緩やかに登って行くと次第に風が強くなり、腰を低くして重心を落とさないと風に煽られてよろけるほどになってきた。そして、北鎮岳の分岐に出ると、西から猛烈な風が吹きつけてきた。北海道第2位の高峰、北鎮岳は分岐から片道20分ほどのピストンだが、行きも帰りも狭い稜線上で真横からまともに風を受けることになるので、少し身の危険を感じて断念。風を正面から受けながら、ゆっくりと御鉢平の縁を進む。中岳を過ぎると尾根が広くなり、歩きやすくなるが、相変わらずすごい風で、腰を落としていないと体が流されてしまう（それでも、昨夏の塩見岳の時の方がずっとひどい風だったが）。ずっと吹きさらしで休む場所がなく、踏ん張りながら歩き続けて、旭岳の分岐となる間

宮岳に到着。ここで少し気がゆるんで腰を高くしたとたん、私が風に煽られて間宮岳の山頂の標識にぶつかってしまい、標識が倒れてしまった。元に戻そうとしたが、重くて無理だった。



御鉢平の縁を緩やかに登る。



御鉢平を左手に見ながら進む。



写真では穏やかに見えるが、すごい風。



北鎮岳分岐。強風が西から吹きつける。



裾合平への分岐。



荒涼とした景色が続く。



旭岳への分岐となる間宮岳山頂（2185m）に到着。少し気がゆるんで腰を高くしたとたん・・・



私は風に流されて標識にぶつかり、標識が倒れてしまった・・・。

2時間半歩き続けで休みたかったが、強風でじっとしていると寒いので、仕方なくそのまま進み、北海道最高峰の旭岳をピストンすることに。

ここも樹がなくて吹きさらしだったが、少し風の弱いところを見つけてようやく休憩をとることができた。荒涼とした景色の中を歩き続け、裏旭のキャンプ指定地と思われるあたりを過ぎると、急に傾斜がきつくなる。ザレていて大変歩きにくい。喘ぎながら登って行くと、逆側から旭岳に登って下って来た人たちとばらばらとすれ違う。最後はほとんど直登となり、なんとか山頂に到着。しかし、水滴を含んだ強風が吹きつけて、とてもではないが休んでいられない。何とか写真を撮って、すぐに間宮岳に引き返した。

間宮岳から再び御鉢平の縁の上を進む。風が少し弱くなり歩きやすくなる。時折、青空が覗くが、なかなか晴れてくれない。御鉢平を左手に見ながら、なだらかな道を進み、分岐点となっている北海岳（2149m）に到着。



2時間半ほど休みなく歩き続けているが、寒くて休めないで、進むことに。ここから旭岳をピストンする。



しばらくは緩やかに下る。



荒涼とした景色の中をひたすら歩く。



次第にガスが濃くなる。眼鏡が水滴で濡れて前がよく見えない。



間宮岳の分岐に戻って、少し安心。



なんとか旭岳山頂に到着。休憩できるような状況ではなかったので、すぐに引き返した。



再び御鉢平を左手に見ながら縁の上を進む。





時折、青空が覗くが、なかなか晴れない。



北海岳山頂。ここから御鉢平を離れる。

北海岳から御鉢平を離れ、南東の方角へ進む。緩やかな斜面を下って行くと、左手に紅葉で有名な赤岳（2078m）が近付いてきた。草地には様々な高山植物が咲いていて、目を楽しませてくれる。8月終わりだというのに、コマクサも咲いていた。

さらに下って行くと、巨岩の点在する庭園のような景色となる。素晴らしい景色だったが、大きな岩の間からヒグマが出てくるような気もして、鈴だけでは心配で笛を吹きながら進む。

不思議なことに、この場所は早い時期に咲くいろいろな高山植物がまだたくさん花を咲かせていて、別天地のようだった。（申し訳ないですが、花の名前が正確に分かりません。）



8月も終わりだが、まだ色とりどりの花が咲いている。



御鉢平を離れる。中央は桂月岳（左）と黒岳（右）。



コマクサ。



緩やかな斜面を下って行く。



紅葉で有名な赤岳（2078m）。



下って行くと、巨岩の点在する庭園のようなところに出た。





ミヤマキンポウゲ？



？



アオノツガザクラ



エゾコザクラ？



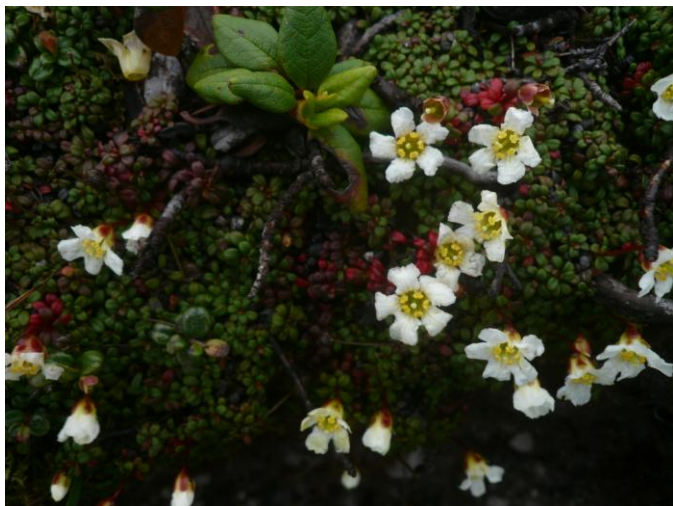
ウコンウツギ



チングルマ



キバナシャクナゲ



イワウメ。これは6月～7月中旬に咲く花。



色とりどりの花を楽しみながら進んでいくと、大きな雪渓にぶつかった。トレースがはっきりしないうえ、ガスで雪渓の向こうが見えず、 どうしたものかとうろろしていたら、一瞬霧が晴れて、向こう岸のマークが見えたのは助かった。

雪渓を渡り、再び花の咲き乱れる庭園の中を進むと、程なく白雲分岐に到着。「人を気にしない親小熊が出没するので注意」などという掲示がしてあった。計画では白雲岳をピストンすることになっていたが、稜線はまだ風が強いようだったし、ガスが濃く、ヒグマが出る心配もあるのでは、白雲岳のピークを踏んでも仕方がないだろう、ということで二人の意見が一致したので、白雲岳のピストンは省略して、小屋を目指すことにした。

「ヒグマ出没注意」の掲示を見てからますます不安になって、二人とも絶えず笛をピッピキならしながら進む。分岐から道はカールのような地形を下っていく。斜面は紅葉が少し始まっていた。ガスが時々薄くなり、前方の高台に白雲岳避難小屋が時々姿を見せる。小さな湿地を横切り、テント場に着的たら、「ヒグマ出没中。小屋に避難して下さい」の張り紙が。背筋が寒くなって、急いで小屋に向かう。そして、2時半過ぎ、無事に避難小屋に到着。正直、ほっとした。



雪渓にぶつかった。



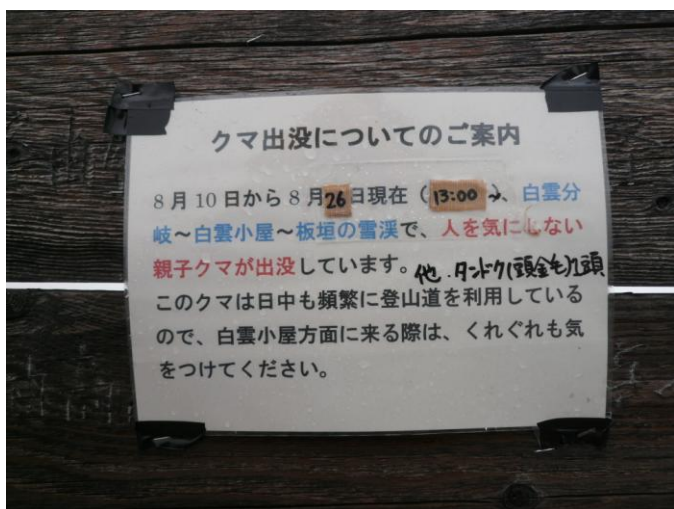
最初はトレースが分からず、少し困ったが、一瞬霧が晴れて向こう岸のマークが見えたので助かった。



白雲分岐。白雲岳ピストンは省略することにした。



チシマクモマグサ？



この掲示には正直なところかなり不安にさせられた。



カールのような地形を下って行く。



ヨツバシオガマ



水場の近くの湿地。



テント場に張ってあったこの掲示には背筋が寒くなった。



小屋は高台にある。



それでも、無事小屋に到着。

小屋には、若い管理人さんと、登山客1名、長期でヒグマの撮影に来ているという写真家が1名が泊まっていた。この避難小屋は、シーズン中は有人で、1泊1000円。2階建てのきれいな小屋である。この日も小屋周辺でヒグマの親子がうろうろしているという話を聞いて、暗くなる前にと、急いで水を汲みに行った。

小屋の中で一休みしていると、管理人さんが「クマがでたよ」と言うので、急いで外に出ると、小屋の下にある雪溪の上で、小熊が2頭、2本足で立ちあがってじゃれて遊んでいる。ここで私は、ナキウサギの観察のために持ってきた双眼鏡を取りに急いで小屋に戻った。肉眼でもよく分かる距離だったが、双眼鏡で見ると、小熊たちが楽しそうに(?)遊んでいる表情までよく分かる。ふと、カメラを忘れたことに気づいて再び小屋に急いで引き返した。しかし、戻ってきたときには熊は雪溪の脇のハイマツの茂みに隠れてしまっていた。これは、この山行最大の失敗だった。いまでも大変後悔している。この山行で一番印象深い光景だった。

夕方、2階で食事をしていると、1階から管理人さんが上がってきて、「下で鍋をやっているからいっしょにどうぞ」と誘ってくれた。食事を済ませてから下に降り、酒を御馳走になりながら管理人さん、先客2人と5人で熊談義となった。管理人さんは、「ここは元々クマのいるところなんだから、クマが出るのは当たり前。クマは人を避けるけど、鉢合わせすると危ないから、それだけ注意すればいい。」と、余裕の表情で言う。例の掲示には「人を気にしない親小熊」とあったが、管理人さん達の話によると、母クマを遠くから見ていたら、母クマが遠くの登山客に気づいて、奇妙な唸り声を出しながら大慌てで逃げて行った、というようなこともあったようで、小熊たちの遊んでいた光景と併せて、ヒグマに対する印象が大分変わり、恐怖心のようなものは薄らいだ。それでも、翌日、ヒグマが出没するという沼の平でテントを張るのは、かなり不安だったが。



水場。北海道の水場は、エキノコックスの心配があるので、たいていは煮沸する必要がある。



小屋の東側の雪溪。この雪溪の手前右端で、小熊たちが遊んでいた。雪溪から小屋までは急斜面になっているので、上から安心してクマを見ることができる。